『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.1（2009）

新聞記事にみられる因果関係の複文
―「から」,「ので」,「ため（に）」を中心に―

高　秀辰
東京外国語大学大学院博士後期課程

要旨

本稿では,「から」,「ので」,「ため（に）」を，主節の構造やそれに伴う従属節の構造と意味特徴から六つの意味タイプに分ける。これにより，主観的，客観的表現とされてきた「から」,「ので」,「ため（に）」の用法の相違を明らかにする。

因果関係の複文の「から」,「ので」,「ため（に）」の従来の研究には，これらの用法の相違について,「から」を主観的な表現,「ので」,「ため（に）」を客観的な表現として論じていることが多い。本稿では，新聞記事にみられる「から」,「ので」,「ため（に）」の用法を考察してみた結果,「から」は話し手の意志や判断，または相手への働きかけの程度が強い場合に使われ,「ので」は丁寧さを要する場合の意志や働けかけの文，一部の判断文に,「ため（に）」は，主に出来事を描写，記述する場合に用いられることが分かった。

1. はじめに

1. 1. 研究の目的

「から」,「ので」,「ため（に）」は理由，原因の意味関係を表す複文であるが，意味の相違が見られる一方，使い分けが難しい例も見られる。

（1）雨が降ったから，遠足は中止された。
　　雨が降ったので，遠足は中止された。　　（作例）

例（1）は「から」と「ので」の意味の相違を述べる際に多く挙げられる例の一つで,「から」が主観的な表現として理由を,「ので」が客観的な表現として原因を表すとされている。「から」と「ので」は例（1）のように入れ換えが可能な場合もあることから，その意味と用法の相違について議論されてきた。また,「ため」,「ために」の接続助詞化により，因果関係の表現は「から」,「ので」,「ため（に）」に使い分けられてきた。

本研究の目的は，「から」，「ので」，「ため（に）」を従属節と主節の構文構造や連接構造という構造的な特徴に注目して分析することにより，各形式の意味特徴や使い分けを明らかにすることである。用法の分析においては，新聞記事をテキスト化したコーパス資料から収集して分析することにより，実例に基づいた実証的な現代日本語の因果関係の複文の記述を目指す。

1. 2. 先行研究

「から」と「ので」の意味の違いに関する研究は永野（1952）から始まっている。永野（1952）は，「『から』と『ので』とはどう違うか」で，従属節に現われる助動詞の種類や，命令文との共起が可能であるか否か，すなわち主節にくる文類型の特徴等から，「から」を「主観的」な表現，「ので」を客観的な表現とまとめている。

そして，奥田（1986 b: 10–11）は，「するから」を「話し手の立場の主張，《私の論理》」に従うものとし，「するので」を「対象のもっている法則性にしたがいながら，現実の世界をえがきだす」《対象の論理》を表わす表現であると定義している。

奥田（1986 b），言語学研究会・構文論グループ（1985 a. b）の《私の論理》，《対象の論理》には，《私の論理》の背後には《対象の論理》が，《対象の論理》の背後には《私の論理》が控えているとしており，この二つは完全に切り離せるものではない。しかし，《私の論理》を支える構文要素として，主節にものがたり文が現れること，《対象の論理》を支える構文要素とには主節にまちのぞみ文，さそいかけ文が現れることを挙げており，主節の文の分類等から客観的，主観的表現であるとまとめた永野（1952）の分類と大きな違いは見られない。

南（1964）は，対等構造，従属構造として捉えられてきた現代日本語の複文を階層的な構造として捉え，複文の内部に現れる要素の違いという面から A から D までの四つの段階に分類した。南の四段階論の概略を表 1 で示す。

表 1　南（1964）の四段階論概略

A 段階は＝状態・程度の副詞＋述語
B 段階＝時修飾語・場所修飾語＋主格＋A 段階のもの＋否定＋時制
C 段階＝陳述副詞＋主題＋B 段階のもの＋モーダルな要素
D 段階＝呼びかけその他＋C 段階のもの＋終助詞

南（1964）は，この四段階論において，「から」と「ので」をそれぞれ C 段階，B 段階のものに分類した。しかし，この南（1964）の四段階論は，「から」と「ので」の位置づけをめぐって多くの問題点が指摘されている。その後，田窪（1987）が南の四段階論の修正，再分類を試み，「から」を行動の理由と判断の根拠の二つに分け，それぞれ B と C 段階に分類したが，「ので」の位置づけの修正は行われなかった。

また，角田（2004: 5）は「モダリティ，および従属節と主節の連接が表す意味関係」に注目し，南論や中右（1986）の意味領域の理論を取り入れ，Ⅰ「現象描写」，Ⅱ「判断」，Ⅲ「働

きかけ」，Ⅳ「判断の根拠」，Ⅴ「発話行為の前提」という五つのレベルを提案している。しかし，角田（2004）の分類は各レベルの分類基準などに疑問点が多々あり，さらに検討するべき点があると思われる。

永野（1952），奥田（1986），言語学研究会・構文論グループ（1985 a. b）の研究は，それぞれの用語は異なるが，「から」と「ので」の主節に働きかけの文が現れ得るか否か等に焦点が合わせられており，いずれも客観的，主観的な表現という定義から逸脱していないように見受けられる。しかし，命令文が主節に現れるか否かという視点からの分類は，今日の「から」と「ので」の意味・用法を明らかにするには十分ではない。

本稿では，永野（1952）の客観的，主観的な表現，奥田（1986 b）の《対象の論理》，《私の論理》，南（1964）の構文要素による複文の段階性，角田（2004）の意味関係のよる階層性という従来の研究を参考にしつつ，「から」，「ので」，「ため（に）」の分類に有効である思われる六つの意味領域を提示し，「から」，「ので」，「ため（に）」の用法の相違を明らかにしていく。

1. 3. 分析対象

本稿で分析対象とするのは接続用法[1]の「から」，「ので」，「ため（に）」に限る。「から」，「ので」，「ため（に）」の接続用法の例を例（2）～（5）で挙げる。

（2）大人がよってたかって甘やかすから，世の中は自分中心にまわっているんだと勘違いし，授業中に勝手な行動をしたりするのではないか。（毎・解）

（3）毎日新聞社社長室広報担当の話：訴状が届いていないので，コメントを差し控えます。（毎・会）

（4）集金コストがかかるため，特例的に超高金利が認められている。（毎・会）

（5）行政は困惑するだろう。しかし，住所がないために行政サービスから除外されている人々が，確かに存在する。（毎・1 面）

考察に用いる用例は，電子化資料「CD-毎日新聞 2006」のうち，2006 年度 1 月分の記事を対象とし[2]，正規表現[3]を用いた検索を 5 回かけて行い，抽出した。なお，文体による違いを

1　接続助詞の「から」，「ので」，「ため（に）」は，従属節と主節の連接時に現れる接続用法，言いさし文もしくは文末に現れ，半終助詞的に用いられる文末用法の二つに分けることにする。なお，連文レベルで二つの文を因果の意味でつなぐことを，接続詞とする。本稿では，このうちに，文末用法や接続詞の「から」，「ので」，「ため（に）」は考察の対象から除外する。以下で，接続詞と文末用法の「から」の例を示す。

接続詞：「朝食抜きは脳にとって最悪。糖分が脳に供給されないと，脳は働かない。
だから 朝食抜きの中学生や高校生はキレやすく，意欲も低いわけです」

文末用法：長男なのに農業を継がず上京した負い目もあった から 。

2　2006 年度 1 月期分の全紙面を対象とし，朝刊，夕刊，地方面をも含める。

3　grep の検索，実行時に用いた正規表現を以下にあげる。

検討するために，新聞記事以外に，補足データとしてシナリオ，小説のコーパスをも用いる[4]。

本稿で考察の対象とする用例の総数を表 2 で示す。表 2 の用例数に対する割合は，「から」，「ので」，「ため（に）」の合計用例数の中の割合を表したものである。

表 2　接続用法の「から」，「ので」，「ため」，「ために」

から		ので		ため		ために		合　計
用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数
457	29.79	494	32.2	565	36.83	18	1.173	1534

（単位＝文，以下同様）

新聞記事に現れる因果関係の複文は用例数の分布からも小説やシナリオのデータとは異なる点がみられる[5]。「ので」や「ため（に）」は，小説やシナリオより新聞記事で多く使われているという結果になったが，これは新聞や小説，シナリオというそれぞれの言語資料の特徴を反映していると見られ，興味深い。

「ため」と「ために」にも使用に偏りが見られ，「ため」は原因の意味で多く使われ，「ために」は目的の意味で多く使われている，という傾向が見られる。この「ため（に）」の使用の偏りに関する問題点は今後の課題とし，詳しい考察は次稿に譲ることにする。

2. 主節の構文的特徴による分類

奥田（1985: 42）は，文には常に内容と形式が結びついているとし，「現実性としての，可能性としての，必然性としての動作・状態が，述語の位置にあらわれる動詞の文法的なかたち

［うくぐすつぬぶむるいただふん］から
［うくぐすつぬぶむるいただふんな］ので　　［うくぐすつぬぶむるいただふな］んで
［うくぐすつぬぶむるいただふんな］ため　　［うくぐすつぬぶむるいただふんな］為

4　小説とシナリオコーパスの作品詳細については本稿末資料一覧を参照。

なお，新聞記事の中の会話文は主に引用の形をとっており，シナリオや小説の会話文とは異なる特徴が見られるので，本稿では新聞記事においての会話文とその他の分類はしない。

5　シナリオにみられる用例分布

から		ので		ため		ために		合　計
用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数
486	91.87	40	7.56	2	0.38	1	0.19	529

小説に見られる用例分布

から		ので		ため		ために		合　計
用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数
4201	54.74	2786	36.77	404	5.33	284	3.75	7675

シナリオデータに関しては，コーパスの性質，すなわち，内容によって「から」より「ので」や「ため」を好む場面が目立っており，病院で医者が患者に説明する場合などのように，出来事を叙述する場合に多く使われる傾向があるように見受けられる。

に実現されている」と述べている。このように，話し手は文にモダリティ形式を伴うか否かを選択することにより，話し手自身の意志や判断を表したり，出来事を描写したりする。

以下では，まず，主節の構文的特徴を分類の一次的基準とし，モダリティ形式を伴うものと伴わないものに大別して考察していく。さらに，モダリティ形式を伴うものを，叙述文とは異なる文類型である勧誘形，命令形と，活用の有無，疑問形という観点から四つに分ける。モダリティ形式を伴うものと伴わないものとの用例数の分布を表3で示す。

表3　モダリティを伴う例と伴わない例の用例分布

	モダリティ形式を伴わないもの		モダリティ形式を伴うもの		合　計
	用例数	%	用例数	%	
から	280	61.27	177	38.73	457
ので	371	75.10	123	24.90	494
ため	503	89.03	62	10.97	565
ために	17	94.44	1[6]	5.56	18

表3から分かるように，「から」，「ので」，「ため（に）」ともに，モダリティ形式を伴わないものが全体の6割以上を占めている。

本稿では，まず，使い分けなどの特徴がより明確に見られる，モダリティ形式を伴う場合の例を中心に分類し，「から」，「ので」，「ため（に）」の意味・用法の特徴を分析していく。その後，モダリティ形式を伴わない場合の例をみていくことにする。

なお，本稿での第一分類基準となるモダリティ形式を伴うものに関する分類においてのモダリティの用語や定義は，基本的に工藤（1989）に従うことにするが，因果関係の複文の用法の特徴を記述するために多少の修正を加える。

2.1. 主節がモダリティ形式を伴う場合

2.1.1. 終止形（切れ）活用のもの

ここでは，まず，終止形（切れ）活用[7]の中でも，命令，勧誘文が主節に現れる例を取り上げて考察する。

---

6 「ため」と「ために」は主節にモダリティ形式を伴う文が現れることが少なく，「ために」の主節にモダリティを伴う例は，伝聞のモダリティの1例のみであった。

〈例〉90年代と比べて乗客の平均体重が5キロ増えたためにジェット燃料が1年に2億7500万ドル（約330億円）分も余計に必要になった［という］。（毎・社）

〈例〉は，伝聞の「という」を用いて聞き手に伝達している出来事が第三者からのものであり，話し手の判断や認識が含まれていないことを表している。すなわち，出来事を記述するという働きをする形式として用いられている。

7　終止＝切れ活用に関しては工藤（1989）参照。

勧誘形，命令形は，行為の結果と聞き手との関りなどから決意文，勧誘文，依頼文，命令文に分けられる。決意文，勧誘文，依頼文，命令文と「から」,「ので」,「ため」,「ために」が共起した用例の分布を表4で示す。

表4　決意文，勧誘文，依頼文，命令文との共起用例数

	から		ので		ため		ために	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
決　意	4	0.88	1	0.20	0	0.00	0	0.00
勧　誘	1	0.22	0	0.00	1	0.18	0	0.00
依　頼	14	3.06	18	3.64	0	0.00	0	0.00
命　令	11	2.41	0	0.00	0	0.00	0	0.00
合　計	30	6.56	19	3.846	0	0.00	0	0.00

表4の用例数に対する割合%は,「から」の全用例数の中で決意，勧誘，依頼，命令文が占めている割合を表したものである。「ので」,「ため」,「ために」もそれぞれの全用例数の中から決意，勧誘，依頼，命令の用例が占めている割合を示した[8]。

「ために」とこれらの文が共起している例は考察の対象とした資料の中には見られなかったが,「ため」は主節に勧誘文が現れている例が1例あった。

(6) 大手メーカーと違い，問い合わせやサポートが十分でない場合もあるため，事前に必ず注意書きを読もう。(毎・家)

例（6）はフリーソフトをダウンロードする際の注意点を述べているものであり，聞き手，行為の実行者は未特定複数である。

(7) しかし,「気が通る器官だから，研究してみよう」との受け止め方で,「機械論」に感服したわけではなかったそうだ。(毎・総)

(8) 何が法に触れるか分からないから，とりあえず情報を出さないでおこう，との事なかれ主義さえ漂う。(毎・2面)

(9) 念のためだが,「誤謬」という言葉を使ったので，付け加えておこう。(毎・読)

例（7）と（8）は「から」の主節に決意文が，例（9）は「ので」の主節に決意文が現れて

8　以下，表の中の割合は,「から」の全用例の中での占める割合パーセントを表す。「ので」,「ため」,「ために」に対しても同様である。

いる例である。

これらの例からも分かるように，「から」の主節に決意文が現れる場合は，従属節に名詞・形容詞述語文が現れた，【名詞・形容詞述語文から決意文】と動詞述語文が現れた【動詞述語文から決意文】の例がそれぞれ2例，2例あったのに対し，「ので」は従属節に動詞述語文が現れた【動詞述語文ので決意文】の例が1例みられるのみであった。

例（9）は書籍の評論の中で使われている例である。行為の申し出[9]の用法の例であるが，前置きや決まり文句としても使われていることが多く，話し手の意志表出性は低い。

（10）私は「コートを持っているから洗っておいで」と声をかけた。（毎・解）
（11）「壁画は持っていっていいから，ここに住ませてくれ」と怒りを込めて語るマウラダさん。（毎・特）
（12）ところが，今年の食事後はきちんと片づけたのだ。私が「後はおばあちゃんが引き受けるから，早く家に帰って休みなさい」と言ったのにである。（毎・解）
（13）前夜，母国グルジアの父に電話した。「負けても，勝ってもいいから，リラックスしていけ」。誓った平常心。（毎・ス）
（14）さらに良い紙面作りを目指していますので，期待してください。（山内）（毎・社・大）
（15）「取材には応じません。寒いので（ドアを）閉めて下さい」。感情を押し殺したような静かな抑揚のない声だった。（毎・会）

例（10）と（11）は依頼文と「から」，例（12）と（13）は命令文と「から」が共起した例であり，例（14）と（15）は「ので」と依頼文が共起した例である。

これらの例を考察してみると，「から」は主に個人と個人の間での依頼，命令の行為の場面で使われている反面，「ので」は，聞き手もしくは行為実行者が未特定個人や未特定多数である場合での行為要求であることが多い。例えば，公共場所で案内や告知をする文，提示をする文，という場面での行為要求文で使われていることが多い。しかし，個人に行為を要求している例もある。次の例をみられたい。

（16）「娘の習い事で少し足りないので貸してくれ」。遠方の知人は昨秋，電話で金の無心をされ，約4万円を振り込んだ。正月にはメールが届いた。（毎・社）

例（16）のように，個人に行為要求をする場合の例は，本稿で考察の対象としている例の中では2例見られるのみであった。そして，2例とも引用文の中で用いられた依頼文であるとい

9　決意文の「しよう」には行為の申し出と行為の提案の用法がある。樋口（1992），日本語記述文法研究会（2003）参照。

う特徴がある。

また，例（11）や（13）のように，「から」と依頼文，命令文が共起する場合は，従属節に「していい」，「してもいい」という許可・許容のモダリティなど，情意や認識系のモダリティが現れ得るが，「ので」は描写文や一部の判断文[10]が現れるのみであり，本稿で分析の対象としている例を見る限り，従属節にもモダリティの共起制限があると思われる。

2.1.2. 活用を持つもの

本節では，自らがテンスを持ち，活用をする当為系のモダリティ，情意系のモダリティ，説明系のモダリティと「から」，「ので」，「ため」，「ために」との共起を考察していく。「から」，「ので」，「ため」，「ために」と当為系，情意系，説明系のモダリティが共起した結果をまとめると表5のようである。

表5　当為系，情意系，説明系のモダリティとの共起用例数

	から		ので		ため		ために	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
当為系	18	3.94	9	1.82	3	0.53	0	0.00
情意系	37	8.10	44	8.91	5	0.88	0	0.00
説明系	22	4.81	12	2.43	3	0.53	0	0.00
合　計	77	16.85	65	13.16	11	1.95	0	0.00

「から」と共起している当為系のモダリティの内訳をみてみると，許容（「してもいい/していい」等），不許容（「してはならない/いけない」等）が5例，適切（「すればいい」等）が2例，適当（「する/した方がいい」）が1例，必要（「しなければならない」等）が6例，当然（「すべきだ」）が4例である。

（17）手法は面白い。紙面を使って論点を掘り下げているのだから，記者の目のような形で最後にまとめ的な意見があってもよい。（毎・特）

（18）「あなたのお父さんは，何度も逆境を乗り越えてきた人だから心配しなくていいよ。がんばりなさいよ」。（毎・ス）

（19）「寒いから早く寝たほうがいいよ」と声がする。のどの奥から絞り出すようなせきが聞こえた。（毎・2面）

（20）前原氏に反対する勢力からも批判が予想され「再選狙いでなくても，微妙なことだからもう少し周囲を固めてから言うべきだ」（中堅衆院議員）との声が党内にも広がって

10　判断文や描写文の定義は三尾（1948）に従う。

いた。（毎・社）

日本語記述文法研究会（2003: 91）は，これらを評価のモダリティと名付けた上で，「評価のモダリティとは，話し手の評価的なとらえ方を表わすものである」と定義している。当為のモダリティの基本的な用法は話し手の「ある事態の評価的な捉え方」を表わすものであるが，動作主語の人称によっては聞き手への働きかけの意味を表すこともある。

例（17）の動作主体は1人称であり，話し手によって事態が許容的であるということを表わしている。一方，例（18）と（19）の動作主体は「あなた」という2人称であり，話し手の当為的な判断によって聞き手へある行動を勧めるという働きかけの意味を持つ。

例（20）の動作主体は「前原氏は」という3人称であるが，既に行われた行為に対する評価を表わす文であり，話し手にとって妥当と思われる事態が成立しなかったことへの不満を表わしている[11]。当為のモダリティが働きかけの意味を持つには，動作主体やテンスに制限があり，動作主体が2人称もしくは3人称であること，スル形テンスであることが必要である。当為のモダリティ形式がシタ形テンスを持つ場合には，過去の出来事への評価や不満，後悔の意味を表す。「から」と共起した当為系のモダリティのうち，働きかけの意味を表わす例は18例のうち8例であった。

一方，「ので」，「ため」と共起している当為のモダリティはいずれも話し手の評価や義務，意志，判断を表すものであり，聞き手への働きかけの意味を持つ例はなかった。例（21）と例（22）は主節に当為のモダリティが現れた場合の「ので」と「ため」の例である。

（21）特に困るのが，2リットル入りのペットボトルだ。わが家はペットボトル飲料を利用しないので，購入して用意しなくてはならず，経済的に負担だ。（毎・解）

（22）社員の疲弊が進んでいるため，賃金を上げた方がいいと，経営者が問題提起し始めたのではないか。大三それは違うと思う。（毎・特）

「ので」と共起している当為のモダリティの内訳は，許容が2例必要が3例，不可避（「せざるを得ない」）が4例であり，「ため」と共起している当為のモダリティは，適当が2例，不可避が1例であった。

また，当為のモダリティと共起する場合，「から」の従属節には判断文や説明のモダリティが現れ得るのに対し，「ので」や「ため」は現象文のみが現れている。

情意系のモダリティには願望の「したい，したがる」，希求の「してほしい/してもらいたい/していただきたい」などがあり，話し手の望みや希望を聞き手に伝えることにより，間接的に意志や依頼の意味を表す。

11　例（20）は社説の中の引用文のものであるが，ここでの「言うべきだ」は未実現の事態ではなく，既に発言された出来事を批判・非難したり反省を促す意味で行われたものである。

(23) ジーコ監督は「今までよりも，ほんの少しでもいいからレベルを上げる努力をしてほしい。自分に対して厳しくなろう」と選手に奮起を促した。(毎・ス)

(24)「せっかく日本で開かれるのだから連日満員にしたい。その実現のために自分に何ができるか」そこには，自らを「侍（さむらい）ハードラー」と呼ぶ，日本人としての責任感とプライドがある。(毎・特)

(25) 同社の大島吉秋マネジャーは「スキー場のリフトは毎日営業している。津南の人たちは豪雪に負けずに頑張っているので，ぜひ多くの人に来てほしい」と訴えている。(毎・会)

(26) 共済組合は「判決を見ていないのでコメントを控えたい」としている。(毎・社)

(27)「総裁候補と言われる方々は（内閣の）枢要な立場にいるのだから職務に専念していただきたい」と注文を付けた。(毎・2面)

(28)（埼玉県春日部市）12日本欄「寛仁親王殿下の発言に思う」に対して，納得できない点を感じましたので，一言述べさせていただきたいと思います。(毎・社)

(29) ただ，傘下の関西歌劇団などの活動を支える必要があるため，企業経営者をトップに，近く新たな団体を設立したい。(毎・会・大)

例（23）と（25）は希求の「してほしい」，例（24）と（26）は願望の「したい」，例（27）と（28）は希求の「していただきたい」と「から」，「ので」節が共起した例である。また，例（29）は「ため」と希求の「していただきたい」が共起している例である。

例（23）から（29）までの全用例が新聞の社説やインタービュー記事の中に引用されている，引用文であるという事実も興味深い。

例（23）と（25）は「から」，「ので」と「してほしい」が共起した例であるが，動作主体が，例（23）は3人称，例（25）は不特定多数であり，働きかけの意味を持つ。

情意のモダリティとの共起は，「から」が37例，「ので」が44例と，「ので」節の方が多く，その中でも願望の「したい」と「ので」節の共起は33例と多かった。しかし，「から」の場合，例（24）のように，個人や団体主語の望みを述べる場合に用いられているのに対し，「ので」の場合，例（26）の「コメントを控えたい」のような決まり文句としての言い方が11例であった。「ため」節と希求が共起している用例は2例あったが，2例とも「言わせていただきます」の例であった。

情意系のモダリティのうち，不本意の「してしまう」と「から」，「ので」，「ため」が共起している用例はそれぞれ，2例，6例，3例であった。

説明系のモダリティ「のだ」，「わけだ」，「ものだ」と「から」，「ので」，「ため」が共起した例はそれぞれ22例，12例，3例あった。

(30) 取材の約束に遅れ，ひどく怒られたことがある。時間を守らないのだから当たり前なのだが，連絡すれば大抵は大目に見てくれた。(毎・会)

(31) 人間と猫は運命の糸によって結ばれているような気がする。…略…目に見えない運命の糸によってつながれているので，紐が馴染まないのである。(毎・特)

(32)「今年は雨が降らないため，富士山の雪が少ないのです」(毎・解)

説明の「のだ」は先行する文と関係付けて聞き手に説明的に，分かりやすく述べる役割をしている。また，「から」，「ので」の主節に現れる説明の「のだ」は，野田（1997）が定義した対事的「のだ」と対人的「のだ」のいずれの例もあり，野田（1997）の，対事的ムードは南の四段階論のC段階（B段階に近いC段階），対人的「のだ」は南の四段階論のD段階（C段階とD段階）のものという位置づけには少し疑問が残る[12]。

2.1.3. 活用を持たないもの

認識系のモダリティは，話し手の想像や判断を表わす[13]。認識系のモダリティを表す形式には，「だろう/にちがいない，かもしれない，はずだ/ようだ，らしい，そうだ（しそうだ/するそうだ）」などがあるが，このうち，「にちがいない，かもしれない/らしい」は活用やテンスを持つが，話し手のある出来事への想像や判断を表わすという認識系の意味特徴を重視し，活用を持たないもののグループとともに考察する。

認識系のモダリティと「から」，「ので」，「ため」，「ために」が共起した結果を表6にまとめる。

表6　認識系のモダリティとの共起分布

	から		ので		ため		ために	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
認　識	61	13.35	32	6.48	23	4.07	0	0.00
伝　聞	1	0.219	6	1.21	27	4.78	1	5.56
合　計	62	13.57	38	7.69	50	8.85	1	5.56

奥田（1984: 56）は「いいきりの文とおしはかりの文との対立は，現実の世界の出来事の認識のしかたのちがいを表現している」とし「『だろう』に推量を表現するという一次的な機能」があると述べた。

12　複文や連文における「のだ」の機能については幸松（2004）参照。

13　認識系のモダリティは，話し手が出来事を間接的もしくは直接的に捉えるものであるという捉え方と，出来事の確かさや不確かさを表わすものであるという捉え方があるが，本稿では，「だろう」を「推量あるいは想像が捉える出来事をえがきだ」す「現実の世界を媒介」とする「間接的な認識の結果」とする奥田（1984: 57）の定義に従うことにする。

このように，認識系のモダリティは話し手の推量や判断を表わし，文の対象的な事柄に対する話し手の認識的な捉え方を表わす。また，因果関係の複文の主節に認識的なモダリティが現れる場合，従属節にさしだされる出来事は推量の原因・理由であるとともに，推量の根拠として働く。

推量の「だろう/と思う[14]」と共起した例は，「から」が 30 例，「ので」が 18 例，「ため」が 10 例であった。例（33），例（34），例（35）は推量の「だろう」と「から」，「ので」，「ため」が共起した例である。

（33）資料など読む暇はなかったはずだから，紙面がそれなりの「クローズアップ」になったのは，記者たちの蓄積と職人芸ゆえだろう。（毎・特）

（34）餌をまとめて置いてきてあるが，他の野良猫も立ち寄るので，足りなくなるであろう。（毎・特）

（35）大学病院は難治性の患者を多く診察し，一般病院にはありふれた病気の患者が多く訪れるため，診療科によっては情報交換という意味合いもあるだろう。（毎・1 面）

「から」の主節に推量のモダリティが現れている例の場合，判断の根拠として，判断文や推量文が用いられているが（例（33）），「ので」や「ため」は描写文がくることが多く（例（34），例（35）），殊に「ため」は推量と共起した全用例の従属節に描写文が現れていた。

証拠性の認識モダリティ「らしい，ようだ，そうだ」と「から」が共起した例は，「から」は 6 例（例（36）），「ので」は 3 例（例（37）），「ため」が 11 例（例（38））であった。

（36）歴史が浅く退職者が少ないから，まだ負担は 1 台当たり 400 ドル程度らしい。（毎・2 面）

（37）私の家で餌をやっていたので，うちの飼い猫だとおもったらしい。（毎・特）

（38）切手が張られておらず，住所も不正確だったため病院に届くのが遅れたらしい。（毎・会）

何らかの証拠に基づく推量を表わす形式と「ため」との共起が多いのは，「ため」節の従属節に現れる出来事が，話し手が客観的に観察したものを用いているという事実とも関係している。

可能性を表わす「にちがいない，かもしれない，はずだ」と「から」，「ので」，「ため」が共起した例はそれぞれ，13 例，6 例，5 例であった。

14　思考動詞である「と思う」は，主語の省略，テンスの消滅（テンスを持たない），「だろう」などの他の推量の形式と言い換え可能などの一定の条件を満たしている場合のみに限り推量と扱う。

「そうだ」は推定にも，伝聞にも使われるが，「するそうだ」で伝聞として使われる場合，話し手が聞いた話をそのまま取り入れたことを表わし，話し手の推量や判断は表わさない。伝聞のモダリティ形式には「するそうだ」と「という」があるが，本稿で考察の対象とした例の中には，「するそうだ」の伝聞の用例はなく，いずれも「という」による伝聞の例のみであった。

認識系のモダリティの周辺的なものとして「のではないか，かしら」があるが，これらの形式と「から」，「ので」，「ため」が共起した例は，12 例，6 例，1 例であった。

2. 1. 4. 疑問の形式

疑問の意味を表す形式には，「か」，「かね」，「かな」，「の」，「？」等がある。これらの形式は疑問文以外にも様々な意味を表し，疑問文[15]の専用形式ではない。しかし，「か」，「かね」，「かな」，「の」，「？」などの形式が現れた文の文末が上昇イントネーションである場合には疑問の意味を表し，これらを疑問の形式と分類して考察する。

疑問文との共起分布を表 7 ようにまとめる。

表 7　疑問文との共起分布

	から		ので	
	用例数	%	用例数	%
疑問文	8	1.75	1	0.20

安達（1999）も指摘しているように，疑問文には相手に新しい情報を引き出そうとするものから，情報の確認や念押しなどの機能を持つものなど，様々なものがある。

（39）高校生の長女が「教科書を読むから聞いてくれる？」と私の寝床に来た。（毎・家）
（40）一夜明けた心境を聞かれ，「（新聞記事の）トップなので，普通とは違うのかな」。（毎・2 面）

例（39）は典型的な疑問文と「から」が共起した例の一つであり，話し手にとって不明確な情報を聞き手に問いかける質問の例である。一方，例（40）は疑問の周辺的な用法とも言われる疑いを表わす疑問文である。「ので」と疑問文が共起した例には，疑いや念押しの意味を表す例しかなかった[16]。

15　疑問文の定後などに関しては安達（1999）参照。
16　日本語記述文法研究会（2003）は「かしら/かな」，「でしょう」の一部を疑問文とし，前者を疑いの疑問文，後者を確認要求の疑問文としたが，本稿では，「かしら」を認識系のモダリティ，「かな」を疑問文とする。

2. 2. 主節がモダリティ形式を伴わないもの

ここまで，モダリティ形式を伴うものと「から」,「ので」,「ため」,「ために」が共起している例をみてきた。ここからは名詞述語文，形容詞述語文，動詞述語文というモダリティ形式を伴わない文が「から」,「ので」,「ため」,「ために」の主節に現れる例を考察していく。

モダリティ形式を伴わない文を品詞別に分類すると，名詞述語文，形容詞述語文，動詞述語文がある。これらは，格やテンスなどの構文的な条件により，話し手の意志や判断を表わしたり，出来事の描写や状態を表わしたりする。

ここでは，主節にモダリティ形式を伴わない文が「から」,「ので」,「ため」,「ために」と共起している例を，主節と従属節の述語を中心に品詞別に分類した上で，格やテンス等にも注目しながら考察していく。まず,「から」の主節にモダリティ形式を伴わない文が現れる用例の分布を表 8 で示す。

表 8 「から」とモダリティ形式を伴わないものとの共起分布

主節 / 従属節	動詞		形容詞		名詞	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%
動詞	81	17.72	29	6.35	0	0.00
形容詞	22	4.81	11	2.41	5	1.09
名詞	46	10.07	20	4.38	7	1.53
モダリティ形式	34	7.44	22	4.81	3	0.66
合計	183	40.04	82	17.94	15	3.28

表 8 は「から」の従属節と主節の各品詞別共起分布をまとめたものである。「から」はいずれの品詞とも共起し得るが，【名詞述語文から名詞述語文】の例は 7 例しかなく，【動詞述語文から動詞述語文】の用例が 81 例と最も多かった。

「ので」の主節にモダリティ形式を伴わない文が現れた用例の分布を表 9 で示す。

表 9 「ので」とモダリティ形式を伴わないものとの共起分布

主節 / 従属節	動詞		形容詞		名詞	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%
動詞	158	31.98	53	10.73	15	3.04
形容詞	46	9.31	13	2.63	2	0.40
名詞	56	11.34	12	2.43	7	1.42
モダリティ形式	8	1.62	1	0.20	0	0.00
合計	268	54.25	79	15.99	24	4.86

「ので」の共起分布を見てみると，主節に動詞述語文がくる例が半数以上を占めており，従属節にモダリティ形式を伴う文がくる場合，主節に名詞文が現れた例はみられなかった。「ため」と「ために」の主節にモダリティ形式を伴わない文が現れた用例の共起分布を表 10 で示す。

表 10 「ため」とモダリティ形式を伴わないものとの共起分布

主節 / 従属節	動詞		形容詞		名詞	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%
動詞	376	66.55	33	5.84	22	3.89
形容詞	47	8.32	2	0.35	3	0.53
名詞	10	1.77	4	0.71	1	0.18
モダリティ形式	5	0.88	0	0.00	0	0.00
合計	438	77.52	39	6.90	26	4.60

表 11 「ために」とモダリティ形式を伴わないものとの共起分布

主節 / 従属節	動詞		形容詞		名詞	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%
動詞	10	55.56	1	5.56	0	0.00
形容詞	4	22.22	1	5.56	0	0.00
名詞	1	5.56	0	0.00	0	0.00
モダリティ形式	0	0.00	0	0.00	0	0.00
合計	15	83.33	2	11.11	0	0.00

「ため」と「ために」の共起分布の傾向を比べてみると，「ため」は主節に名詞述語文が現れる用例が「ので」と同様の割合を占めているのに対し，「ために」は動詞述語文の例が全 17 例のうち 15 例と多く，主節に名詞述語文が現れた例は見られなかった。

2. 2. 1. 動詞述語文

以下では，「から」，「ので」，「ため」，「ために」ともに最も用例数が多かった主節に動詞述語文が現れる例から考察していく。

(41)「前と違って議員宿舎に帰るわけにはいかないから，今日は早く帰る」（毎・1 面）

(42) 経産省電力基盤整備課は「石炭をダメといわれても困る。ただ，今のままでもいいとは思わないので工夫を求めていく」と話す。（毎・3 面）

1 人称主語，動作動詞のスル形の動詞述語文は，話し手の意志的な動作を描くものとして，話し手の意志を表わす。例（41）と（42）は，「早く帰る」，「求めていく」という意志動詞の未来テンスを用いて話し手の強い意志を表わしている。このように，動詞述語文を用いて話し手の意志を表わしている例は，「から」が 11 例，「ので」が 2 例あった。「ため」，「ために」には動作動詞の述語文が話し手の意志を表わしている例はみられなかった。

また，動作動詞の述語文かつ 3 人称動作主体が主語である場合は，話し手の推量や断定を表わすが，本稿で考察の対象としている例の中には該当する用例はなかった。

（43）気象庁の予測では 7 日日中に大雪が降るとの見通しだったが，日本海にあった低気圧が同日早朝に消滅したため，降雪量は予測の半分程度にとどまった。（毎・1 面）
（44）数年前，資格証明書を持って来院したが，治療費が払えないために通院を中断した患者がいた。（毎・特）

「ため」と動詞述語文が共起した例には，天気や病気などの状況を描写するものが 176 例と多く（例（43）），その他の例も状態動詞や非意志動詞が用いられ，ある事柄の状況や状態を叙述するものであった。「ために」と動詞述語文が共起した例は，いずれも例（44）のように状態動詞（非意志動詞）を用いて出来事の描写を表わす例のみであった。

2. 2. 2. 名詞述語文，形容詞述語文

名詞述語文，形容詞述語文は物の質や特性を表わし，話し手の判断を表す判断文として分類できる。三尾（1948）は「体言は体言だ」という形式が判断文の典型的な形式であるとし，述語に体言の他，形容詞，形容動詞，形容動詞的な副詞がきた場合にも判断文に分類した。

（45）私は陸上選手だから，陸上が順調ならそれはそれで幸せ。（毎・ス）
（46）初演とキャストが大幅に変わりましたけれど，博多座でのお客様の反応がとても良いので楽しみです。（毎・芸）
（47）…略…脂質のカプセルに閉じ込める。これなら，室温で 2 年間の長期保存も可能だ。研究所で見せてもらったが脂質に包まれているため本物の血液よりやや白っぽい。（毎・経）

例（45）は感覚の形容詞を用いて人の感情を述べる判断文が「から」節の主節に現れており，その判断文の理由も判断文でさしだされている。例（46）は「ので」の主節に名詞述語文が現れた例であるが，「ので」と共起する名詞述語文，形容詞述語文は感情や感覚を表わすものが 31 例と多かった。例（47）は「ため」の主節に形容詞述語文が現れた例であるが，「ため」と名詞，形容詞述語文が共起する例のうち，58 例が判断の原因に現象文を用いていた。

田野村（1990）はいわゆる判断文の中には「判断を表わさない」ものが多く含まれているとし，名詞，形容詞述語文の一部は話し手の「判断を表わさない」と述べている。

例（47）は文脈の中に，予め「脂質のカプセルに閉じ込める」という背景知識が提示されており，この背景知識が事実に関する認識となり，話し手に存在する。例（47）のように，予め出来事の背景，事実が話し手に認識されている場合には，必ずしも話し手の判断，断定のみで成立し，話し手の判断が前面に表れているとは言えない。本稿では，例（47）のように，話し手が判断する際に予め背景知識が与えられている，という場合の例を，田野村（1990）の「判断を表さない判断」と分類する。このような判断を表わさない判断文の例は「ため」と名詞述語文，形容詞述語文が共起する場合にみられる。

3. 構文的特徴に基づく意味による再分類

2 主節の構文的特徴による分類では「から」,「ので」,「ため」,「ために」の主節に現れる文を，モダリティ形式を伴うものとモダリティ形式を伴わないものという基準で分類した上で，従属節のモダリティの特徴も分類の基準に加えて考察してきた。

そして，モダリティ形式を伴うものを**2.1.1 終止形（切れ）活用のもの，2.1.2 活用を持つもの，2.1.3 活用を持たないもの，2.1.4 疑問の形式**に分類した。

終止形（切れ）活用には，主に叙述，勧誘，命令形の三つの形式が挙げられる。このうち，叙述は終止（連体）同形として論じている説もあり，本稿でも終止（切れ）活用として勧誘形，命令形を分類した。

勧誘形，命令形はさらに決意文，勧誘文，依頼文，命令文に分けられるが，このうち，決意文は１人称動作主体であり，相手に行為を要求する働きかけ文ではない。これに対し，勧誘文，依頼文，命令文は相手に行為を要求する働きかけの意味を持つ。

本稿では，聞き手への働きかけを表わす意味タイプを【働きかけ】，話し手の決意を表わす意味タイプのものを【意志】と名付け，勧誘文，依頼文，命令文を【働きかけ】，決意文を【意志】に分類する。

また，話し手にとって不明確な情報を聞き手に問いかけたり，確認したりする文を【疑問】と名付け，疑問の形式をこの意味タイプに分類する。

2.2 主節がモダリティ形式を伴わないものでは動詞述語文と名詞述語文，形容詞述語文をとりあげて考察した。動作述語文は動詞の種類や動作主体の人称により，出来事の描写，話し手の意志・断定の意味を表わす。

これに対し，名詞述語文，形容詞述語文は，典型的には論理学のいう「A は B だ」という命題の形式をとり，判断を表わす。本稿では，これらを，述語の品詞，動作主体，テンス・アスペクト，主語の格，話し手の判断の介入如何などから【描写】,【記述】,【判断】と分類する。また，田野村（1990）のいう「判断を表さない」名詞・形容詞述語文を【記述】に分類する。

以下で，各意味タイプ別の分類に関して詳しく考察していく。

3.1. 働きかけ

聞き手もしくは相手に対して行為要求性，働きかけ性を持つものを【働きかけ】と名付ける。【働きかけ】の典型的なものとしては命令文があるが，丁寧さ，待遇性を持ち，かつ相手に行為を要求する依頼文や勧誘文もこの意味タイプに分類する。

勧誘文，依頼文，命令文と共起する「から」,「ので」,「ため」にはある違いが見られる。次の例をみられたい。

(48) 業界紙の会社というと，世間ではとかくゴロツキヤクザのような人がやっている会社と見られがちなので，社員はどんな時でもキチットした恰好をしましょう，というのが鎌田の考え方だった。(新橋)

(49)「業界紙の記者などというのはそれでなくともヤクザ，ゴロツキがやっているような仕事に見られるのだから，服装はきちんとするように」(新橋)

例（48）は，会社の朝礼で全社員に向けての発話であり，例（49）は会社で「鎌田」という話し手が聞き手個人に服装を注意する際に発したものである。例（48）と（49）は動作主体が個人であるか，団体もしくは多数であるか，行為要求性を強く要求するものなのか，待遇性を前面に出す場面で使われたものなのかに違いがある。

すなわち，より丁寧な命令，依頼が必要な場面においては「から」より「ので」が用いられ，個人の間のような，待遇性よりは聞き手に行動することを望み，聞き手への強い働きかけに重点をおいている場面では「ので」より「から」が用いられている。なお，近年では，行為要求においてより丁寧さを表わしたい場合や，行為要求者である働きかけの主体を中和したい場合には,「ため」が使用されるという例も見られる。

(50) 大手メーカーと違い，問い合わせやサポートが十分でない場合もあるため，事前に必ず注意書きを読もう。(毎・家)

例（50）は，インターネットでフリーソフトウェアをダウンロードする際の注意点を喚起するために使われた文である。例（50）において，注意を呼びかける対象，動作主体は不特定多数である。このように,「ので」と「ため」はカタログなどの注意書きや公共場所などの案内文，告知をする文，ルールなどを提示する場面で使われることが多く，不特定多数への行為要求の文に多く使われる。

また，当為系のモダリティや情意のモダリティにも，動作主体が2人称もしくは3人称のものは，働きかけの意味を持ち，これらも【働きかけ】の意味タイプに分類できる。

【働きかけ】の意味タイプに分類されるモダリティ形式をまとめると次のようだ。

表 12 【働きかけ】

当為系・情意系のモダリティのうち，スル形テンス，2 人称もしくは 3 人称動作主体のもの。 勧誘文 依頼文 命令文（禁止を含む）

【働きかけ】の意味グループの中でも，命令文が最も働きかけの程度が強く，当為系・情意系のモダリティが最も待遇性が強い。これは，「から」，「ので」，「ため」の用法の違いや使用場面にも反映されており，「から」と「ので」，「ため」は行為要求性と待遇性という面で対立していると思われる。

3. 2. 疑問

「か」，「かね」，「かな」，「の」，「？」という形式には，疑問の意味を表すものと，確認要求や感嘆の意味を表す場合がある。このうち，感嘆の意味を表す場合は上昇イントネーションを持たないなど，疑問とは異なる構文的な特徴を持つ。

このように，「か」，「かね」，「かな」，「の」，「？」が上昇イントネーションを持ち，不明確な情報を聞き手に問いかけたり，確認したりする意味タイプを【疑問】と名付ける。本稿で考察の対象にした用例には，【疑問】の意味グループに属する「から」の例が 8 例，「ので」が 1 例と用例が非常に少なく，「ので」には疑いの意味を表す疑問文と共起している用例があるのみであった。従って，ここでは【疑問】の意味グループは「から」とは共起できるが，「ので」，「ため（に）」とは共起できないと指摘するにとどまる。

3. 3. 意志

当為系，情意系，認識系，説明系のモダリティの多くは，聞き手への働きかけの意味を持たず，話し手の評価，義務，意志，断定的な認識を表す。このように，話し手の強い意志や評価を表わす意味タイプのものを【意志】と名付ける。

1 人称動作主体のスル形テンスの当為系，情意系のモダリティ形式は，話し手の出来事への評価的な態度や意志を表す。

説明のモダリティは，文の対象的な事柄に対する話し手の認識的な捉え方を表わし，意味的な分類の面から【意志】の意味グループに分類できる。

また，動詞述語文のうち，動作動詞のスル形テンス，動作主体が 1 人称の場合は意志を，3 人称の場合は断定を表わす。これらの形式も【意志】の意味レベルのものに分類する。

確認要求を表す形式も【意志】の意味グループの周辺的なものとして【意志】に入れる。「かしら」や上昇イントネーションの「だろう」，「だろうか」，「のではないか」は形式的には疑問文にも入れられるが，本稿では，工藤（1989）や日本語記述文法研究会（2003:178）にも

述べられているように，これらの形式が情報提供や発話現場においての認識の成立を表すことにより，話し手の出来事の認識の仕方に関わっているという点に注目し，【意志】の意味グループに入れる。

【意志】の意味レベルは，話し手の動作への意志を表わすものと出来事への推量，説明を表わすものに大別できるが，前者には「ので」が多く，後者には「から」が多いのが特徴である。しかし，「ので」節はいずれも用例が少なかったため，【意志】の意味グループとは自由に共起できないとみられる。【意志】の意味タイプに分類できる形式をまとめると表 13 のようである。

表 13 【意志】

決意文
1 人称動作主体，スル形の当為系，情意系モダリティ
認識系のモダリティ
説明系のモダリティ
1 人称，3 人称動作主体，スル形の動詞述語文
確認要求の疑問文形式

3. 4. 判断と記述・描写

名詞述語文，形容詞述語文は，典型的には「題目は解決だ」という構造をなす形式として話し手の，人や物の質や特性に対する判断を表わす。このように，名詞述語文と形容詞述語文が主節にくる例を【判断】と名付ける。

当為系，情意系のモダリティのシタ形テンスは，過去にそうするべきであったという不満や評価を叙述するものであり，【判断】に分類できる。

動詞述語文は，典型的には現象文の「主語がする」という構造を持ち，出来事を描写する機能がある。動詞述語文には格や主語，テンスにより話し手の意志，断定を表わすことも，出来事を描写する機能を持つこともある。このように，動詞述語文を用いて出来事を描写する働きをする文を【描写】と名付ける。

【判断】と【描写】は主に品詞による分類であるが，名詞述語文の場合，【判断】のみを表わすわけではない。形容詞述語文，名詞述語文には，田野村（1990）のいう「判断を表わさない」のもある。

（51）この日数では感染の広がりを最小限にとどめる「封じ込め」策の成功は難しいため，WHO 西太平洋地域事務局の尾身茂事務局長は「早期発見の改善が会議の最大の課題だ」と指摘した。（毎・3 面）

例（51）は，従属節，主節ともに形式的には判断文の形式をとっているが，この文の背景に

は話し手に予め既定の知識として感染の広がりを最小限にとどめることが出来る最小限の日数に関する事実認識があり，必ずしも話し手が断定して判断しているとは言えない。

このように，名詞述語文，形容詞述語文の構造をなしているが，話し手に前もって対象的な出来事への背景知識や事実認識がある場合，すなわち報告文の類のものは【判断】の意味タイプから除外し，【記述】に分類する。しかし，【記述】の意味グループの分類基準は明確ではなく，平叙文における判断の問題は今後の課題とし，さらに考察していきたい。

伝聞の「するそうだ」,「という」等の形式は，聞き手や第三者などの他者から取り入れた情報を話し手が述べるものであり，話し手の判断や意志は含まれていない。従って，伝聞の形式も【記述】に分類する。

これらの意味タイプにおいての「から」,「ので」,「ため」,「ために」の分布傾向をみると，「から」は【判断】の意味タイプとの共起が多く，「ので」は【記述】,「ため」は【記述】と【描写】と多く共起する。一方,「ために」と【判断】の意味タイプとの共起はみられず,【描写】の意味グループのみ共起できる。【描写】,【記述】,【判断】の意味タイプ別分類は次のようだ。

表 14 【描写】,【記述】,【判断】

【描写】：動詞述語文（1 人称・3 人称動作主体かつ動作動詞のスル形テンスを除く）
【記述】：報告文類（名詞述語文，形容詞述語文の一部），伝聞の形式
【判断】：名詞述語文，形容詞述語文（判断を表わす典型的な判断文形式のもの）

4. 結論と今後の課題

以上の結果を踏まえ，新聞記事にみられる「から」,「ので」,「ため」,「ために」の用法の特徴を次のようにまとめる。

〈1〉新聞記事コーパスは小説やシナリオコーパスに比べ,「ため」の使用頻度の多さが目立つ。小説やシナリオコーパスでは,「から＞ので＞ため＞ために」の順の使用頻度が見られるが，新聞記事には「ため」の用例が最も多く，これは事実を報告，伝達，叙述するという新聞記事の特性に拠るものであると思われる。

〈2〉永野（1952:479）は「ので」節の特徴として,「主観を超えた現象や事柄の叙述，事象をありのまま，客観的に描写する場合に使われる」と述べているが，本稿での分析結果をみると，これは「ため」,「ために」の特徴に当てはまる。すなわち,「ため」,「ために」は出来事を記述する場合に多く使われており，永野（1952）が挙げた「ので」節の特徴は本稿の「ため」,「ために」節の用法に当てはまる。

〈3〉主節と従属節の構文構造，モダリティ形式との共起関係から，描写，記述，判断，意志，疑問，働きかけという 6 つの意味タイプに分類した。この六つの意味グループにおける「から」,「ので」,「ため」,「ために」の用例の分布傾向をまとめると次のようである。

表 15　意味タイプ別分布傾向

	から		ので		ため		ために	
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
描　　写	172	37.64	266	53.85	438	77.52	15	83.33
記　　述	9	1.97	53	10.73	86	15.22	3	16.67
判　　断	98	21.44	58	11.74	6	1.06	0	0.00
意　　志	128	28.01	93	18.83	34	6.02	0	0.00
疑　　問	8	1.75	1	0.20	0	0.00	0	0.00
働きかけ	42	9.19	23	4.66	1	0.18	0	0.00
合　計	457	100.00	494	100.00	565	100.00	18	100.00

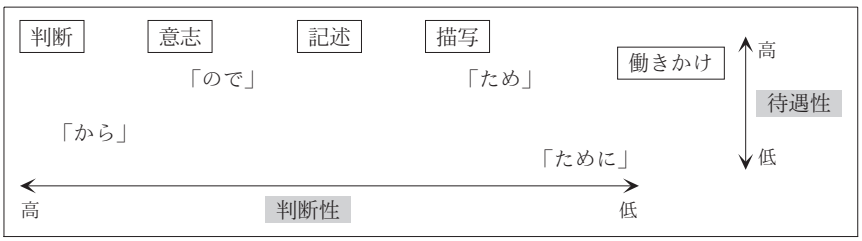
〈4〉出来事の記述するか話し手の判断であるかという面から見ると，「から」は話し手の判断を前面に押し出して表現する場合に，「ので」は主に出来事を記述する場合に用いられるが，「ので」は話し手の判断を原因として用いる場合もある。また，「ため」，「ために」は事象や事柄をありのまま表現する場合に用いられる。

さらに，「から」は個々の間の依頼や命令のような，行為要求性が前面に出る場合に，「ので」は丁寧さや待遇性が必要とされる場面に用いられることが多い。そして，掲示文等のような，行為要求者が中和されやすい命令・依頼文では「ため」が用いられることもある。ちなみに，「ために」と依頼文が共起した例は見られなかった。

すなわち，「から」，「ので」，「ため」，「ために」は話し手の判断性，出来事の記述性の面から対立し，使い分けられていると思われる。

各意味タイプ別の分布傾向からみられる「から」，「ので」，「ため」，「ために」の用法の特徴をまとめると表 16 のようである。

表 16　因果関係の複文の意味領域



〈5〉**3.1 働きかけ**でも述べたように，「から」と「ので」(，「ため」) は行為要求における聞き手への待遇性という面で対立している。新聞コーパスでは，「から」節と「ので」節の依頼・命令文における待遇性の高低という面での住み分けが小説やシナリオコーパスより明白に行われている。

永野（1952），奥田（1986 b）などの従来の研究では，「から」と「ので」を主観的な表現であるか，客観的な表現であるかに焦点を当てている。しかし，現代日本語においての因果関係の複文は，「ため」，「ために」の使用頻度の急激な増加とともに，「から」，「ので」の意味・用法も変化してきており，主観的な表現か客観的な表現か，または主節に命令文が現れるか否かで用法の相違を明らかにすることは難しい。

そこで，本稿では，モダリティ形式との共起関係に基づいて 6 つの意味タイプに分類してその意味タイプ別の分布傾向から，「から」，「ので」，「ため」，「ために」の用法の違いを考察した。用法を簡単にまとめると，「から」は【判断】や【意志】の意味グループでもっとも多く用いられ，「ので」は一部の【意志】の意味グループや【記述】の意味グループで，「ため」，「ために」は【描写】や【記述】の意味グループで用いられることが多い。さらに，待遇性の面から見ると，「から」は行為要求性が高い場面において好んで用いられ，「ので」は丁寧さが高く，行為要求性が低い場面での依頼・命令の場面で好んで用いられる。

本稿では，モダリティ形式を伴う文，モダリティ形式を伴わない文，というモダリティ形式を中心に分析してきたが，問題点も多い。

まず，モダリティ的に無標形式であるものを，動詞述語文は主語の人称やテンスを中心に【描写】，【判断】に分類し，名詞述語文，形容詞述語文はある事実が話し手の認識に存在するか否かによって【記述】，【判断】に分類した。ここでの【判断】は三尾（1948）が定義した判断文とは定義が異なってくるため，新たな判断の定義や分類の基準が必要になってくる。この判断の問題に対しては今後さらに考察していきたい。

また，于（1996: 34）は主文のモダリティとの共起関係のみを手掛かりとする分類には不備があるとし，「から」と「ので」を「話者の主体的理由付け方の角度から検討」している。また，武内（1995）は関連性理論を用いて「から」と「ので」の分析を試みている。今後，これらの研究も検討した上で，因果関係の複文における意味の違いを生み出す要素を様々な側面から分析していきたい。

参考文献

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』，くろしお出版.

于日平（1996）「因果性表現に現れる根拠扱いの客観性と主観性―『ノデ』と『カラ』の相違について―」，『筑波日本語研究』創刊号: 34–48.

奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）」，『日本語学』3/12: 54–69，明治書院.

―――（1985）「文のさまざま（1）文のこと」，『教育国語』80: 41–49，むぎ書房.

―――（1986 a）「まちのぞみ文（上）」，『教育国語』85: 21–32，むぎ書房.

―――（1986 b）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文―その体系性をめぐって」，『教育国語』87: 2–19，むぎ書房.

工藤浩（1989）「日本語の文の叙法性　序章」，『東京外国語大学論集』39: 13–32.

言語学研究会・構文論グループ（1985 a）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文（一）―その 1・まえがき―」,『教育国語』81: 19-31，むぎ書院.
―――（1985 b）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文（二）―その 2・原因的なつきそい・あわせ文―」,『教育国語』82: 26-43，むぎ書院.
田窪則行（1987）「統語構造と文脈情報」,『日本語学』6/5: 37-47，明治書院.
武内道子（1995）「『ので』と『から』：関連性理論による分析」,『神奈川大学 言語研究』18: 111-123，神奈川大学言語研究センター.
田野村忠温（1990）「文における判断をめぐって」,『アジア諸言語と一般言語学』785-795，三省堂.
角田三枝（2004）『日本語の節・文の連接とモダリティ』，くろしお出版.
永野賢（1952）「『から』と『ので』とはどう違うのか」,『国語と国文学』7-7，明治書院（『日本の言語学 4』467-488 再収）.
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4　第 8 部モダリティ』，くろしお出版.
野田春美（1997）『（の）だの機能』，くろしお出版.
樋口文彦（1992）「勧誘文―しよう，しましょう―」，言語学研究会編『ことばの科学 5』175-186，むぎ書房.
三尾砂（1948）『国語法文章論』，三省堂.
南不二男（1964）「述語文の構造」,『国語研究』18　國學院大學国語研究会（『日本の言語学 3』507-530，再収）.
幸松英恵（2004）『現代日本語の複文・連文における因果と説明の関係』東京外国語大学大学院修士論文（未公刊）.

略語一覧

新橋:椎名誠『新橋烏森口青春篇』
（毎・○）
毎：毎日新聞 2006 年 1 月
○：掲載面
1 面：一面，2 面：2 面，3 面：3 面，解：解説，社：社説，国：国際，経：経済
特：特集，総：総合，家：家庭，文：文化，読：読書，ス：スポーツ，会：社会
芸：芸能

資料一覧

〈小説〉
CD－ROM 版 『新潮文庫の 100 冊』（翻訳作品を除く戦後以降の 43 作品）
石川淳「焼跡のイエス・処女懐胎」（1946）/小林秀雄「モオツァルト・無常という事」（1946）/竹山道雄「ビルマの竪琴」（1947）/大岡昇平「野火」（1948）/太宰治「人間失格」（1948）/壺井栄「二十四の瞳」（1951）/井上靖「あすなろ物語」（1954）/福永武彦「草の花」（1954）/三島由紀夫「金閣寺」（1956）/大江健三郎「死者の奢り・飼育」（1957）/松本清張「点と線」（1957）/開高健「パニック・裸の王様」（1957）/三浦哲郎「忍ぶ川」（1960）/水上勉「雁の寺・越前竹人形」（1961/1963）/安部公房「砂の女」（1962）/山本周五郎「さぶ」（1963）/吉行淳之介「砂の上の植物群」（1963）/阿川弘之「山本五十六」（1964）/北杜

夫「楡家の人びと」(1964)/井伏鱒二「黒い雨」(1965)/倉橋由美子「聖少女」(1965)/遠藤周作「沈黙」(1966)/吉村昭「戦艦武蔵」(1966)/有吉佐和子「華岡青洲の妻」(1966)/星新一「人民は弱し官吏は強し」(1967)/野坂昭如「アメリカひじき・火垂るの墓」(1967)/石川達三「青春の蹉跌」(1968)/三浦綾子「塩狩峠」(1968)/五木寛之「風に吹かれて」(1968)/新田次郎「孤高の人」(1969)/立原正秋「冬の旅」(1969)/渡辺淳一「花埋み」(1970)/井上ひさし「ブンとフン」(1970)/高野悦子「二十歳の原点」(1971)/筒井康隆「エディプスの恋人」(1977)/曽野綾子「太郎物語」(1978)/藤原正彦「若き数学者のアメリカ」(1978)/沢木耕太郎「一瞬の夏」(1981)/宮本輝「錦繡」(1982)/赤川次郎「女社長に乾杯！」(1982)/塩野七生「コンスタンティノープルの陥落」(1983)/椎名誠「新橋烏森口青春篇」(1985)/村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」(1985)

〈シナリオ〉

野沢尚『眠れる森』/君塚良一『踊る大捜査線 THEMOVIE 2 レインボーブリッジを封鎖せよ！』/向田邦子『阿修羅のごとく』/坂元裕二『東京ラブストーリー TV 版シナリオ集』/伴一彦『パパは年中苦労する』/伴一彦『サイコドクター』/北川悦吏子『ロングバケーション』/野沢尚『眠れる森』